

西北官衙地区の調査

—第108-8次

1 はじめに

この調査は、道路新設にともない、樫原市醍醐町で実施したものである。調査面積は350㎡、調査期間は2000年10月30日から11月22日である。

本調査地は、藤原宮西北官衙地区にあたることから、藤原宮期の遺構の検出を主たる目的とした。また、これまでの周辺の調査では、平安時代末から室町時代にかけての遺構が多く検出されており、当時期の遺構の確認も視野に入れて調査を実施した。

調査地の基本層序は、上から盛土、旧耕土、旧床土、黄灰色砂質土、褐灰色砂質土、暗赤褐色砂質土、青灰褐色シルト(地山)であり、遺構検出はおおむね青灰褐色シルト面で行った。その標高は、67.4~67.6mである。

2 検出遺構

検出した遺構には、井戸(2基)、南北溝、礎石建物、掘立柱塼などがある。

SA9027 調査区東部に位置する逆L字形の掘立柱塼。南北2間、東西1間分を確認した。柱掘形の一边は30~40cm、柱間は2.1~2.2mである。柱穴から10世紀の土師器が出土した。

SB9028 SA9027の西側に位置する東西方向の礎石列で、東西棟の礎石建物と想定される。桁行4間、柱間は2.1~2.2mである。据付掘形の一边は40~50cmで、そこに径30~35cmの礎石が据えられている。出土遺物はほとんどなく、時期不明。

SD9029 調査区西部で確認した南北方向の素掘溝。上幅1.6m、底幅0.4m、深さ約70cmで、横断面形はほぼ

逆台形を呈する。埋土の下層からは13世紀前半の、また上層からは14世紀中頃の瓦器が出土した。

SE9030 SD9029を切る石組井戸。2.7×2.7mの円形の掘形をもつ。内径約1m、深さ約2mで、底に曲物を据えている。また、石組内には、藤原宮式軒丸瓦(6275D)が組み込まれていた。埋土には、14~15世紀の土師器を含む。

SE9031 SE9030と同様の形態をもつ石組井戸。掘形は1.8×2.0mの不整形円形で、内径0.7m、深さ1.8m。底には曲物を据えている。埋土からは、13世紀の瓦器・土師器が出土した。

3 まとめ

本調査地は藤原宮西北官衙地区にあたるものの、藤原宮期の遺構は確認されず、出土した藤原宮式軒瓦(4点)が、当地に宮期の遺構面が存在したことをうかがわせるのみである。藤原宮期の遺構が希薄である傾向は、これまでの周辺の調査においても認められ、その原因として、後世の大規模な削平があったこと、また地下水位が高いため、もともと藤原宮内の空閑地的な部分であった可能性などが指摘されている。

また、今回の調査で検出した遺構は平安時代から室町時代にかけてのものであったが、そのなかで、とくにSD9029の存在は注目される。すなわち、本調査地の南方の調査(第27-6・63-2・66-3・66-4・75-12次)において、二重もしくは一重の環濠をめぐる中世の環濠居館と想定される遺構が複数確認されている。それらの環濠の形態・時期・位置を考慮すると、SD9029は同時期に存在した環濠の一部である可能性が高く、その西側に位置するSE9031は、居館の内部施設と捉えることができよう。(播摩尚子)

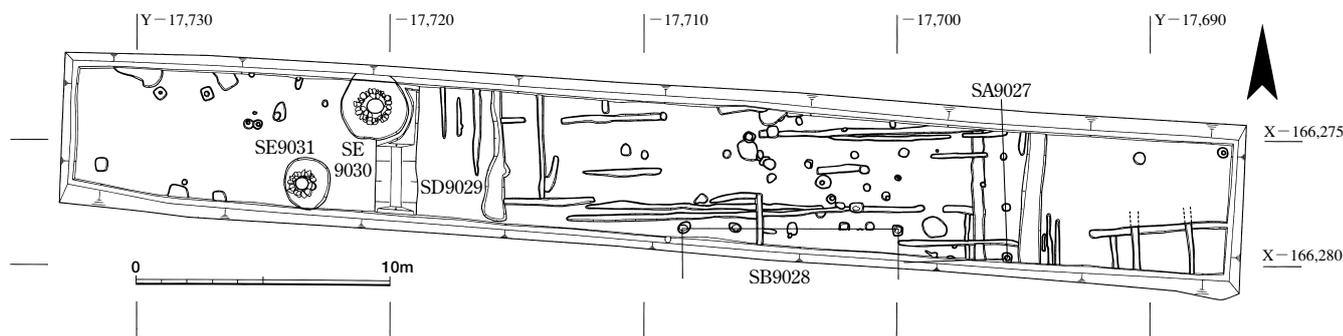


図64 第108-8次調査遺構図 1:300